『真實心』第二十四集平成14年度2003年3月発行（京都光華女子大学）

編集後記

『真実心』第二四集をお届けします。平成一四年度、新入生対象の学長講話、および宗教講座の計五編が収められています。

皆さんは本学で仏教を学ばれ、宗教講座なども聴かれたわけですが、現在は、宗教をどのように理解されているでしょうか。

そこで、宗教とは何か、一つ挙げれば、自己認識を通して人間をも含む存在の奥義を知ることであって、その逆ではないということです。例えば、私たちは自己を知らなくとも、世に知られる識者や学者ともなり得るが、自己について無知であることはただ自己を知らないという一事にとどまるだけではなく、人間にとって、それは根本的な無知（根本無明）を表している。この無知こそ宗教がいつの時代も糾そうとしている第一の関心事なのです。

己をかえりみて、己を知れ。たとえ学文（学問）をひろくしていかほど物を知り

『真實心』第二十四集平成14年度2003年3月発行（京都光華女子大学）

たりとも、己を知らずば、物知りたるにあらず。

鈴木正三『盲安杖』

「己をかえりみて、己を知れ」という正三（一五七八－一六五五）の言葉は、宗教が自己認識の問題であることを端的に示しているが（ついでに言えば、デルポイの神殿に掲げられた「汝、自らを知れ」も同じ文脈にそっていわれたものである）、彼もまた、学問をどれだけ深く究めようとも、自己を知らないとしたら、無知以外の何でもない、と言い切る。

ここには、いわゆる学問というものが人間にとってどの程度のものであり、たとえ学問に一生を捧げ、名なり功を成し遂げたとしても、この生を無駄に使い果たし、無知のままこの世を去ることもあり得るのです。イエスはそんな人たちを「彼らは空でこの世に入り、再び空でこの世から出ようとしている」（『トマスの福音書』）と言ったが、私たちは人間として生まれたにも拘わらず、自分にとって本当に知るべきは何かを知らないまま人生を終えることがあるのです。

最後になりましたが、ご講話をお願いしました先生方には、ご多用の中、原稿にお

目通しいただいたことを厚く御礼申し上げます。なお、本文の文責はひとえに編集委員にあることをお断りしておきます。

（編集委員）